

## 授業概要（バイオ環境学部科目）

科目名	学期	曜日	講時	担当者	授業概要
遺伝子工学	春	火	1	寶関 淳	現代社会において医学・創薬・物質生産などに不可欠な技術である遺伝子改変技術について、その分子生物学的な基礎からその応用に関する知識を習得し、バイオテクノロジーの基礎と応用を理解できるようになる。
都市自然化デザイン論	春	火	1	原 雄一	本講義では、都市の中の水辺などに着眼して自然の再生のデザインを学ぶ。具体的には、ドブ川の再生、洪水対策での生態的手法、海外での都市の水辺再生などを対象として、具体的なイメージを確立する。さらに、多くの人々が暮らす都市の中に潜み分散して存在する自然の価値を再評価することに触れる。また、実際のフィールドワークに参加することで、具体的な問題を現場で感じ取ることをとする。これらの事項を学んだあとグループに分かれて、都市の自然を再生する手法などに関するグループディスカッションとパワポによる発表を行う。
バイオ環境と社会のつながり	春	火	2	高澤・藤井	自然環境の劣化や生産環境の荒廃、地域社会の弱体化や食糧問題、現代社会で我々人間が直面している問題は多岐にわたる。本科目では、自然環境、生産環境、都市環境、地球環境、地域環境など様々な現場で発生している諸問題に取り組んでいる先達の豊かな活動経験を聴くことによって、それに取り組む視点と方向性を各人が思考し、バイオ環境学部での学習のおもしろさと重要性を認識する。さらに、NPO等の活動事例や、地域振興に結びつく農業ビジネスの実践事例の分析を通じて、持続的な社会形成のための社会的及び経済的視点を養成し、課題解決の意識を醸成する。
応用微生物学 A	春	火	2	萩下 大郎	微生物を使って製造される各種の食品・飲料・調味料について概説する。京都、亀岡の発酵・醸造関連企業で働いておられる方々にもご登壇頂き、製造方法や企業活動そのものについてお話し頂く。
数学	春	火	2	伊東 和彦	数学は自然科学のすべての分野を構成するための基礎として最も重要な要素をなしている。したがって、自然科学的概念の理解のためにはまず最初に数学的概念とその手法の修得が必要となる。この講義では数学の体系の中で解析学の基礎となる行列、行列式、微分、積分、複素関数などについて具体例をもとに考察する。
発酵醸造学 A	春	火	2	萩下 大郎	微生物を使って製造される各種の食品・飲料・調味料について概説する。京都、亀岡の発酵・醸造関連企業で働いておられる方々にもご登壇頂き、製造方法や企業活動そのものについてお話し頂く。
物理学	春	火	2	櫻間 晴子	我々の生活は物理学を活用した様々な技術によって支えられている。本講義では、力学から原子物理学を含めた広い物理学分野を取り扱い、それらに関連する身近な事例を通して、物理学の基本的な概念や法則について講義する。
有機反応機構論	春	火	2	清水 信泰	有機反応は一見、無秩序に起こっているように見えるが、反応性の背後にはそうなる理由が必ずある。有機分子を構成する電子の偏りや働き（動き）を官能基と関連付けて体系的に理解できれば、有機化学が暗記だけに頼らなくてもよいことが分かる。本講義では、代表的な有機反応の機構を、有機電子理論（誘起効果、共鳴効果）の立場から平易に解説していく。授業内容はできるだけ精選し、網羅的ではなく、本質的で重要な事項に限定する。基礎的な概念を十分理解できるように演習問題に取り組む、知識を整理して概念の応用力を身につける。
環境物理学	春	火	3	伊東 和彦	物理学は自然科学のすべての分野の中で、精密科学を構成するための基礎として最も重要な要素をなしている。したがって、自然科学的概念の精確な理解のためにはまず最初に物理学的概念とその手法の修得が必要となる。この講義では物理学の体系の中で環境物理学の基礎となる質点系、連続体、振動、波動、光などについて具体例をもとに考察する。
里山学	春	火	3	鈴木 玲治	人々の暮らしが生み出してきた二次的自然である里山は、原生的自然とは異なる多様な生物を育ててきた。しかしながら、人間生活の変化に伴い、このような二次的自然は急速に失われようとしている。また、近代化の過程で森林・農地・河川は分断され、個別の場での効率が追い求められてきた結果、多くの環境問題を引き起こし、良好な生産や環境の維持が困難な状況に至っている。本講義では、失われつつある二次的自然の価値を見直しながら、国内外の学術的・実践的事例に学び、人と多様な生物の共生を可能とする暮らしのあり方を考える力を涵養することを目的とする。また、これらの内容に関連するテーマを各自が設定して文献調査や聞き取り調査等を行い、その成果をレポートにとりまとめ、口頭発表を行う。

## 授業概要（バイオ環境学部科目）

科目名	学期	曜日	講時	担当者	授業概要
物理学	春	火	4	伊東 和彦	物理学は自然科学のすべての分野の中で、精密科学を構成するための基礎として最も重要な要素をなしている。したがって、自然科学的概念の正確な理解のためにはまず最初に物理学的概念とその手法の修得が必要となる。この講義では物理学の体系の中で古典物理学の基礎となる物理空間、運動法則、放物運動、エネルギー、運動量などについて具体例をもとに考察する。
環境生物学	春	金	1	鈴木 玲治	地球温暖化、森林破壊、食糧危機など、21世紀に深刻化することが危惧される諸問題の理解には、地球環境や地域環境に対する学際的・分野横断的なアプローチが不可欠である。本科目では、大気、地形、土壌などの非生物的環境と、その中で生きる主体としての生物との相互作用を理解すると共に、その相互作用の中で人間活動の関わりを総合的な視点で捉えることを目的とする。
生物有機化学	春	金	1	清水 信泰	我々人間を含めたあらゆる生物は、有機化合物の集合体である。したがって、有機化合物の構造特性や反応様式は、生命の維持や活動に重要な要因になっている。現代の科学ではその細部まで解明されている訳ではないが、生命現象に影響を与える有機化合物、すなわち「生物活性物質」について最新の情報を本講義で紹介していく。特に生体内における化合物の合成経路や、生成した化合物の構造と活性の相関について詳しく解説する。
微生物学 I	春	金	1	井口 博之	微生物は、食品（発酵・食中毒）、疾病・公衆衛生、農業（堆肥・植物栄養・植物病害）、地球環境（元素循環・廃棄物処理）、バイオテクノロジー（微生物生産・遺伝子工学）に関わる。それ故に、食・農・バイオ産業の従事者にとって微生物に係る知識・技術は欠かせない。本講義は、微生物の性質と扱いについての全般的な基礎知識の習得を目標として行う。
バイオマス利用学	春	金	2	藤井 康代	バイオマスの資源としての価値が再評価されてきている。これからの農業を考えるうえで、バイオマスの利用は不可欠である。この講義では、バイオマスの利用に必要なバイオマスの特徴や変換方法を理解する。特に堆肥化について学ぶ。
分子生物学	春	金	2	Rafael Prieto	分子生物学では、生命現象の基本である遺伝とタンパク質合成を中心に、生体高分子合成反応を理解することを目標とする。本講義では、DNAの二重らせん構造と染色体構造、DNAの複製とDNAからタンパク質へ遺伝情報が伝達される仕組み（転写、翻訳）及びその調節機構を分子レベルで理解できるようにする。さらに、遺伝子の組換え、DNAの突然変異、修復及び環境適応等について学ぶ。一方、遺伝子の構造と機能に関する重要な知見は実際どのような実験によって明らかになったかを理解できるようにすることを目的とする。
水環境化学	春	金	3	高澤 伸江	水環境について、全球的な規模の水環境から身近な水環境まで、特に化学の観点から幅広く理解する。水環境を評価するための様々な指標について知り、今後の水環境と人間活動について考察する。講義法とグループワークで学ぶ。講義内容を深めるため、実際の水環境のデータを用いて各自図表を作成し、その図表からグループで水環境の現状を解釈する。
環境化学	春	月	1	若村・金川	私たちの身の回りには、私たちの健康に直接の害作用がある物質がいくつかある。これらの物質は、空気を通じて、また飲み水や食べ物を通じて体内に入り込み、害作用を示す。このような直接的に害作用を及ぼす物質が、どこで発生して、どんな害をもたらすのかを化学的な視点から講義する。前半では、ダイオキシンや農薬などの問題などを取り上げる。またそれに加え、放射性物質についても取り上げる。後半では、地球環境問題として二酸化炭素の発生、アスベスト問題、シックハウス症候群、重金属汚染問題などを取り上げる。
作物栄養学	春	月	1	藤井 孝夫	高等植物は、一般に光独立栄養生物であり、光と水と空気、土壌から供給されるミネラル栄養を吸収することによってその生活環を完了することができる。本講義では、主に土壌から供給される水やミネラルの吸収メカニズムやそれらミネラルの植物体内での機能について理解することを目的としている。また、作物の栄養として土壌に投入する肥料等の種類や性質、それらを用いた農作物の肥培管理の考え方を理解する。講義はプリント資料を配布して行う。講義3回終了ごとに小テストを実施し、理解度を確認する。
植物細胞工学	春	月	2	高瀬 尚文	物細胞の成り立ち、細胞の構造と機能、遺伝子の構造と機能発現、遺伝子組換えの要素技術を学ぶ。また、遺伝子組換え技術の具体的な研究開発事例とその課題、今後の可能性を学ぶ。

## 授業概要（バイオ環境学部科目）

科目名	学期	曜日	講時	担当者	授業概要
環境アセスメント	春	月	3	原 雄一	日本における環境問題の変遷の大きな流れを学び、環境アセスメントの制度が成立してきた経緯を理解する。環境アセスメントを実施する際、地域の概況を的確に理解することは、その後の環境影響評価を行う上で重要なステップであり、本講義では自然地理学の観点から、地域の概況に関する地圏、気圏、水圏、生物圏などの自然のつかみ方を学ぶ。また、実際のフィールドワークに参加することで、具体的な問題を現場で感じ取ることとする。これらの事項を学んだあとグループに分かれて、環境アセスメントのなかで自然地理学がどのように関連づくか、グループディスカッションとパワポによる発表を行う。
水環境デザイン論	春	月	4	金川 貴博	亀岡市で使用した水の大部分は保津川（正式名称は桂川）に入り、淀川を経て大阪湾に流れ込んでいる。淀川の水は大阪府民の水道資源として利用されており、亀岡市に対しては、生活廃水などを適切に処理して、保津川へ流れ込む水の質を良好に保つことが求められている。生活廃水の処理については、下水処理場で処理するという考えだけでなく、水路や河川での浄化作用も利用することが重要である。なぜなら、現在の多くの河川の水質は、下水処理場から放流される処理水よりも格段に良好であり、下水処理場に廃水を流し込むことだけを考えるよりは、自然の浄化能力を利用することも考えた方が、水質が良くなると考えられるからである。飲料水は私たちの生活の基本になるものである。安価で良質の水道水を手に入れるためには、家庭下水や工場廃水の処理だけでなく、河川や湖沼のもつ浄化能力が最大限になるように環境を整えることが必要である。この講義では、家庭下水や工場廃水の人工的に処理方法の基本と、河川での自然の浄化について学ぶ。
環境地球科学	春	水	1	伊東 和彦	地球科学は自然科学、特に物理学・化学などの分野を基礎として自然体系を構成する総合科学である。したがって、自然の総合的体系の精確な理解のためにはまず最初に物理・化学的概念とその手法の修得が必要となる。この講義では自然科学の体系の中で地球科学の基礎となる地殻、地震、火山、地球内部、地球磁場などについて具体例をもとに考察する。
食品安全学	春	水	1	藤田 裕之	食品は人の生命を維持するために必要不可欠であり、その安全性について考慮することが非常に重要である。本講義では残留農薬、環境汚染物質、食品添加物等の作用と安全性について、これらの化学物質による健康への影響について学習する。また、食糧の確保や安全の面から注目されている遺伝子組換え食品やBSEについて、食品の安全性を確保するための法的規制や方策についても学習する。さらに、従来のように食品成分だけに注目した安全性を考えるのではなく、自然環境、社会制度、経済構造、国際的な食糧需給など、幅広い視野から食の安全性について考察する。
森林環境・林業論	春	水	1	丹羽 英之	森林は林業資源としての性質を持っているだけでなく、森林生態系として環境を形成し、人間社会からみて、多面的機能と呼ばれるさまざまな恵みも提供している。その豊かな恵みを持続的に享受していくことを目的として、森林生態系の現状と傾向、課題と対応について概説し、これからのありかたを展望する。
健康食品学	春	水	2	矢野・松原	高齢化社会を迎え、健康食品の効果、安全性、医薬品との関係など、健康食品をめぐる問題は多く、摂取の仕方によっては、人の健康に深刻な影響を与える。本講義では、食品学および栄養学などの基礎にたつて、健康食品がもつ問題を多角的に分析し、正しい健康食品のあり方、適用法について理解する。また健康食品を中心とした食のリスクコミュニケーターとしての役割について考察する。なお、この科目は健康食品管理士認定試験の受験資格に必須であり、この講義中に認定試験のための事前準備も実施する。
食品加工学Ⅱ	春	水	2	安達 修二	原材料である農水畜産物を加工し、食品または食品素材を製造するための加工法やそのための装置について理解する。また、それぞれの加工法の原理を理解し、他の食品や食品素材などの加工や生産に応用する力を身につける。基本的には毎回、講義の理解度を測るための小テストを実施する。また、その日のまとめを配布するので、復習に活用する。
地球科学	春	水	2	伊東 和彦	地球科学は自然科学、特に物理学・化学などの分野を基礎として自然体系を構成する総合科学である。したがって、自然の総合的体系の精確な理解のためにはまず最初に物理・化学的概念とその手法の修得が必要となる。この講義では自然科学の体系の中で地球科学の基礎となる宇宙空間、太陽系、惑星運動、固体地球、地球回転などについて具体例をもとに考察する。

## 授業概要（バイオ環境学部科目）

科目名	学期	曜日	講時	担当者	授業概要
土壌の科学	春	木	1	藤井 孝夫	土壌は陸上植物にとって、必須の環境のひとつである。特に高等植物の生存を支え、農業生産において重要な役割を担っている。土壌の生成や機能について学ぶことはバイオ環境を理解する上で不可欠である。土壌の特性について理解を進め、土壌と植物との関係や農作物を栽培する土壌の適切な管理方法、土壌と地球環境との関わりについて学ぶ。講義はプリント資料を配布して行う。さらに講義3回終了ごとに小テストを実施し、理解度を確認する。
作物保護学	春	木	2	河田 尚之	病害虫や雑草などの生物的ストレスは、農業生産の大きな阻害要因であり、その防除のためには病害虫や雑草の生態や作物との相互関係を理解する必要がある。そこで、病害虫防除の基礎となる植物病原菌、害虫や雑草の種類や生態について解説し、各論として作物、野菜などの主要な病害虫に対する抵抗性と化学的・耕種の防除技術を紹介する。また、雑草の管理技術、温度、水や栄養塩類の過不足などの非生物的環境ストレスに対する農作物の耐性と環境ストレスを受けない栽培技術についても解説する。
自然保護思想	春	木	2	阿野 晃秀	そもそも「自然を守る」とはということなのか。何を「自然」と呼び、何のために守るのか。自然保護の現場においては、各々の立場による価値観・主張の食い違いを乗り越え、合意形成を図ることが求められる。合意のための建設的議論を行うためには、自然科学の視点に加え、自然と密接に関わる歴史や文化、広くは「価値観」を扱う、自然まつわる「哲学的視点」が必要とされる。一連の講義を通して、主に近・現代の自然保護をめぐる主要な議論や多様な自然保護・共生の概念を理解する。加えて、各議論の争点についてディスカッションやレポート課題などを通して熟考することで、豊かな自然観を形成するとともに、整理された論理的思考能力を習得することを目的とする。
農業生産学	春	木	2	佐藤・北島	食料生産としての園芸を生産技術と生産性から考えてみる。全体像を理解した後、園芸作物を果樹、花卉、野菜に分けて、それぞれの作物栽培の特徴・概要を講じる。また、各園芸作物については必要な品目について栽培技術の内容にもふれ、栽培に当たってより具体的なイメージを持てるようにする。
食品加工学 I	春	木	3	四日 洋和	加工食品は、農林畜水産物を原料に、物理的単位操作（加熱・殺菌・蒸留・抽出・混捏・乳化・乾燥等）と化学的・生物学的処理操作（発酵、酵素反応等）を組み合わせた種々のプロセスを組み合わせて作られる。本講義では、実際の加工食品を例に挙げながら食品の特性と加工原理を理解し、安心安全な食料供給の仕組みを学ぶ。
生物学	春	木	3	大西 信弘	これから多岐にわたる生物系の分野を学習する上で、基礎となる、生物の遺伝と進化、生命活動とエネルギー、動物の生殖と発生について理解し、生物学の基本的な考え方を修得することができる。
バイオ環境デザイン原論	春	木	4	原 雄一	バイオ環境学部全体とバイオ環境デザイン学科の教育目標をまず理解する。次に、デザインという言葉に着眼し、地球・日本・森林・河川・都市がどのようにデザインされたのか基本的な構造を学ぶ。さらに、農村や都市の疲弊を象徴する人口流出などの身近な社会の諸問題に関心を広げる。このような地域の問題への対処として地域の再生が各地で広がってきていることの情報整理し、デザインというキーワードを中心に地域再生の具体的な手法を学ぶ。地域再生を考えるとときに必要となる「地域」に関して日本の国土に広がる「地域」を最初に理解する必要がある。
化学生態学	秋	火	1	若村 定男	本講義では、「生物間で取り交わされる情報化学物質を読み解いて生き物の生き様を解き明かす生物学」という見地にたって、生物間相互作用について学ぶ。すべての生物は他の生物との相互作用の中で生活している。ヒトもその例外ではない。相互作用の基本は、食うー食われるという栄養関係にあるが、本講義の中心は、たとえば食物探索に利用される匂いや味といった情報を運ぶ化学物質とその役割について学ぶことにある。すなわち、同種、異種の生物間でやりとりされる生物情報について、情報化学物質とその機能を中心に知識と理解を深める。
都市環境診断学	秋	火	1	原 雄一	本講義では、都市環境を診断する上での生物指標や持続可能指標など指標について学ぶ。指標を算出する過程で統計学が必要となる。分散や標準偏差などの統計の基礎的な理論とビッグデータなどの最新の統計学の潮流についても学習する。解析結果に関しては地理情報システム（GIS）と連携させた表現方法を習得する。その後、実際の地域をケーススタディとして取り上げて、統計的な手法により地域特性分析を行う。春学期の都市自然化デザイン論（フィールドワーク）とも関連が深いので合わせて受講することが望ましい。

## 授業概要（バイオ環境学部科目）

科目名	学期	曜日	講時	担当者	授業概要
生態学	秋	火	2	大秦 正揚	生態学は生物の生活様式・相互作用を合理的に解釈・説明することを目的とする。生物社会における個体・個体群・群集の各階層でみられる生活様式・相互作用を概観し、どのような合理的解釈・説明がなされているのかについて講義する。
シリーズ特別講義B	秋	火	3	藤田 裕之	日本のバイオ技術は、農学分野だけでなく、食品、医薬品等、幅広く応用されている。このような技術は、日本にとどまらず、世界に向け技術発信されている。この講義では、各分野で第一線で活躍されている方、あるいは企業や研究施設で研究されている研究者・技術者の方々を講師としてお招きし、バイオテクノロジーを応用した商品開発の最前線について講演して頂き、将来の展望についてもお話を頂く。
森林立地・土壌学	秋	火	3	鈴木 玲治	本講義では、以下の4点を目的とする。①森林の成立に関与する土壌・気象・地形等の立地環境因子とその相互作用に焦点をあて、これらの因子が森林の種組成・構造・遷移などの諸特性にどのような影響を与えているかを理解する。②樹木-土壌-大気-水はひとつにつながった生態系であり、相互に影響を及ぼしながら物質のやりとりをしていることを理解し、物質循環における森林生態系の機能や役割について理解する。③人為の影響を受けた二次林の成り立ちや特徴を学びながら、持続可能な森林管理のあり方を検討する能力を涵養する。④熱帯林を取り巻く立地環境と熱帯の林業の特徴についても学び、温帯と熱帯における立地環境の違いと樹木の生理生態的特性を踏まえながら、各々の地域の森林の造成・保全上の問題点を解決する方法を理解する。
微生物の世界	秋	火	3	萩下 大郎	地球上には、きわめて多数のまた多種類の微生物が存在し、動物、植物とともに人間生活に影響を与えている。これらの微生物は、健康へ負の影響を与えたり、発酵食品、工業製品などの有用物質の生産にかかわり、また、自然界の物質循環に関与することにより地球環境の保全さらには環境浄化に役立っている。本講義では、人間生活において微生物の果たしている役割を、生物学的、産業的、環境的視点から学び、暮らしの中の身近な微生物の特長を理解する。
生物化学	秋	火	4	金川 貴博	私たちは、毎日、食べ物を食べて、これを消化して吸収し、分解してエネルギーを得るとともに、体を構成している細胞を新しく作り直して、古い細胞と入れ替えている。その細胞の中では、化学反応が常に行われており、私たちの日々の活動を可能にしている。生物の体内でどんな反応が起こり、どのようにして生命が維持されるのかは、私たちの健康や、他の生物の生態を考えるための基本となる事柄である。また、iPS細胞や遺伝子組換え食品など、私たちに身近な話題になってきたバイオテクノロジーを理解するためにも必要な基本的な事項である。この講義で、生命維持に重要な化学反応の概要を理解することが出来る。
都市環境論	秋	金	1	原 雄一	都市の成り立ちの履歴や痕跡について学び、現在の都市の水辺空間に着眼してその魅力の背景を知る。次に世界の地域の風土を知ることで日本との比較を行う。また、都市での水供給、排水問題、廃棄物問題、ヒートアイランドなどの都市特有の課題の原因と対策を学ぶ。さらに地域での一定の地区や集落単位など、比較的小さな空間スケールでの自然、地形、気候、人口、交通、産業、歴史、文化などをフィールドワークも加えて総合的に把握する手法を学ぶ。
都市緑化材料学	秋	金	1	阿野 晃秀	緑化材料を適切に使用できるかどうかで、ランドスケーププロジェクトの成否は大きく左右される。この授業では、都市緑化に用いられる植物材料や植栽基盤の種類や性質と主要な環境緑化技術についての知識を習得する。また、土曜・日曜を活用したフィールドワークを数回取り入れ、実際のプロジェクトにおける各緑化材料の使用方法を観察することで、理解を深める。
統計処理論	秋	金	1	四日 洋和	農業・食品業界における日常業務から得られる数値データの取り扱いに関して、Excelを用いた実践的な統計処理手法について学習する。
農地管理論	秋	金	1	河田 尚之	農業生産力の向上と農業の持続的発展には、作物と農業環境との相互関係、特に農地環境が作物生産に及ぼす影響を理解する必要がある。そこで、作物の栽培に適した気象条件、土壌及び作物栄養、物質循環、用排水や栽培管理などの知識と技術を概説し、優良農地の維持・管理に必要な農地改良や圃場整備の手法を解説する。また、日本および世界の様々な農業様式を学び、環境問題や食料問題の解決に向けた取組を解説する。

## 授業概要（バイオ環境学部科目）

科目名	学期	曜日	講時	担当者	授業概要
バイオインダストリー論	秋	金	2	萩下 大郎	今世紀の社会の様々な問題は、バイオサイエンスを基盤とした産業を抜きに考えることは出来ない。本講義では様々な分野で実施されるバイオ関連の実験や研究に従事する技術者としての基礎力ならびに応用力を養うことを目的とする。生物機能を利用するための技術を中心として、生化学、分子生物学、遺伝子工学の3つの分野をはじめ、微生物バイオテクノロジー、植物バイオテクノロジー、動物バイオテクノロジーの基礎知識、技術関連知識を学び、実際のバイオテクノロジーに対応可能な知識を持ったバイオ技術者を目指す。
食品分析化学	秋	金	2	四日 洋和	グローバル化した食品産業の安心安全および品質保証を確保する上で、食品分析に関する知識は重要性を増している。この授業では、実践的な食品分析技術およびその知識を得ることを目的として、基礎的な分析技術から最新の分析機器を利用した微量分析法、加えて、食品分析に関わる法規制について学習する。
有機農業論	秋	金	2	北島 宣	有機農業の背景やコンセプトおよび栽培技術を学ぶとともに、農業が様々な分野と有機的に結びつく有機的農業について論じ、農業の未来を展望する。
バイオマス科学	秋	月	1	藤井 康代	バイオマスの中で木質系のバイオマスの占める割合は高い。特に樹木は重要なバイオマスである。樹木の組織のほとんどは細胞壁である。木材の一般的な性質は細胞壁の構造や成分によるところが多い。樹木には大きく分けると針葉樹と広葉樹が存在するが、両者には外観のみならず細胞組織に大きな違いがあり、木材の性質に影響を与えている。本講義では針葉樹材、広葉樹材の比較をしながら、木材の理解に必要な生物学的・物理学的・化学的性質の基礎知識を習得することを目的としている。
ランドスケープエコロジー	秋	月	1	丹羽 英之	ランドスケープ＝地域の景観は人と自然の共同作品である。地球46億年の歴史とともに、ごくわずかな期間の間になされた、人間による大きな働きかけ＝土地利用と資源利用、およびその結果発生したさまざまなインパクトが、景観を作ってきた。それゆえ、景観を丁寧に分析すれば、自然環境の論理と、それに対応してきた人間の文化の論理を浮かび上がらせることができる。一方、地球環境危機の現在、自然との共生や低炭素、循環型社会への転換が求められる中、自然立地的な土地利用への転換が不可欠である。この講義では、そのプランニングとデザインの手がかりとして、景観生態学の基礎を学ぶ。
生理学	秋	月	1	矢野 善久	生体は多種多様な外部環境の変化に曝されているにもかかわらず、その内部環境は常に一定の状態に維持されている。この恒常性の維持には生体を構成している組織、器官、臓器などの連携と調和が必要不可欠である。本講義では人体の恒常性の維持機構を理解するために神経系、内分泌系および免疫系を中心に学習し、個体全体がどのようにして生体反応を統合的に制御し、生体システムを維持しているのかについて理解する。さらに、生体システムの破綻が引き起こす疾病についても理解を深める。
バイオマス概論	秋	月	3	金川 貴博	今日の私たちの生活は、再生不可能な資源である化石資源（石油、石炭、天然ガスなど）に大きく依存しており、このことが、地球の温暖化や大気汚染、水質汚染など、様々な環境問題を引き起こしている。さらには、私たちの生活を支える基盤であるこのような資源が、近い将来に枯渇することが確実視されており、現在のような大量生産、大量消費の生活様式はやがて破綻する。また、原子力で生産する電気に頼るのも、災害の危険性や使用済み核燃料の処分の困難さなど、多くの問題を抱えている。一方、古来より人類は、樹木や草木（イネ、麦、野菜など）を、食料、原材料、エネルギー源として利用してきた。これらは、太陽エネルギーを利用して育った生物であり、持続的に再生可能な資源である。将来、資源の枯渇が起こることは確実であり、これに対処するためには、持続的に再生可能な資源の利用を促進することが必要になる。この講義では、人類の生存を支えてきた生物システムの全体像を、地球規模での物質循環という視点から説明し、生物由来の再生可能な資源（バイオマス）の利用のあり方や、環境問題およびエネルギー問題を考えるための基礎的な事項を修得する。

## 授業概要（バイオ環境学部科目）

科目名	学期	曜日	講時	担当者	授業概要
社会と環境問題	秋	月	4	金川 貴博	2011年に福島第一原子力発電所の事故により、大量の放射性物質が環境中へ撒き散らされ、現在も、放射性物質の排出は、一時よりは減ったとはいえ、まだ続いている。このような放射能汚染という環境問題に、私たちは、どう対処すべきなのか。明治期には、工業や鉱業の発展によって、有毒な排ガスや廃水が放出されて、作物が育たないという事態や健康被害が起こった。戦後には、工業のめざましい発達に伴い、空気、水、および食べ物の汚染が急激に進行して、水俣病、イタイタイ病、四日市ぜんそくなど、大きな健康被害が出た。しかし、国も加害者も被害の拡大防止に努めず、多くの被害者を産み出した。また、公共工事による環境破壊も起こった。この講義を通じて、過去の環境問題に対して加害者がどう行動し、国がどのように対応し、被害者や一般市民がどう考えて、どう対処したのかを学んで、ここから得られた教訓を将来にいかす。
農環境論	秋	水	1	北島 宣	野生植物の栽培化による農耕の起源は環境と密接に関わっている。また、農耕の伝播による環境変化により作物は環境適応性を獲得する。一方、農業生産が環境に及ぼす影響も大きい。このような農業生産と環境との関係を論じるとともに、環境変動に対応する農業の方向性を考察する。
微生物学Ⅱ	秋	水	1	井口 博之	微生物学Ⅰでは一般微生物学を学んだのに対し、微生物学Ⅱでは環境微生物学・微生物生態学を主に学ぶ。具体的には、微生物の進化・分類・多様性や自然環境中での働きの内容となる。さらに、微生物生態の研究に用いられる最新の分子生物学的・遺伝子学的の解析技術についても解説する。本講義は、微生物についての専門知識を高め、さらにバイオ研究（卒業研究）に取り組んでいくための基盤づくりも目指す。
保全生態学	秋	水	2	丹羽 英之	保全生態学は、生物の自生地における、種や個体群およびその遺伝的多様性の保全、生態系や景観の保全において重要な役割を果たす学問である。また、問題の所在を科学的に明らかにし、保全の科学的な方法や技術を提示し、科学的な立場から社会に実践を要求する応用科学である。本講義では、保全生態学の基本的な理論を学び、様々な事例学習の科学的な立場を理解する。
ランドスケープデザイン	秋	木	1	阿野 晃秀	ランドスケープ＝地域の景観は「人と自然の共同作品」である。地球上の多様で美しい都市・農村景観は、自然の作用と人間の作用が絶妙なバランスを保つことで形づくられてきた。景観を注意深く観察することで、自然の論理とそれに対応してきた人間の社会・文化の論理（なぜ今の様な景観が生まれたのか）を読み解くことができる。また一方で、審美的な関心のために土地を改変する唯一の生物が人であるとも言われており、ランドスケープの形成には、論理的・機能的な側面に加えて、「美」を扱う応用芸術的側面もある。地球環境危機に対して人間社会が自然共生型社会への転換を迫られている今日、自然の論理に逆らうことなく賢く対応する土地利用（プランニング・デザイン・マネジメント）が強く求められている。こうした流れを受け、庭園・公園・緑地・広場・まちづくりなどに対する具体的な提案によって、社会の抱える多様な課題を総合的・同時に解決へと導き、美しく豊かな景観を形成することを目指す「ランドスケープ・アーキテクチャー」に世界的に期待が集まっている。この講義では、ランドスケープ・アーキテクチャーに関わる近・現代の重要なトピックについて基礎的な知識を習得することを目的とする。
遺伝育種学	秋	木	2	河田 尚之	農作物の生産力向上や高品質化には、作物の遺伝的改良が大きな役割を果たしており、その成果である優良品種に関する知識と、その活用は農業技術の基盤となっている。そこで、作物育種の基礎となる遺伝学について、メンデル遺伝学、集団遺伝学および分子遺伝学について解説する。これらの遺伝学の基礎知識を理解した上で、作物の起源、品種改良の歴史、育種の基礎原理と主要な農作物の育種法とその成果について解説する。また、育種目標形質の遺伝解析や選抜手法からゲノム編集などの最新の育種技術について解説する。
食品物性学	秋	木	2	安達 修二	食品の属性とその評価法、粉体の特性と分級、食品の特性に多く関与する水の役割を理解する。また、エマルションの調製と安定性を通して、分散系食品の基礎事項を理解する。さらに、食品素材の硬さや粘弾性などの力学特性に関する理論や測定法の原理を理解し、嗜好性や加工特性に及ぼす影響や咀嚼・嚥下などとの関係を修得できる。基本的には毎回、講義の理解度を測るための小テストを実施する。また、その日のまとめを配布するので、復習に活用する。

## 授業概要（バイオ環境学部科目）

科目名	学期	曜日	講時	担当者	授業概要
生体高分子学	秋	木	2	寶関 淳	生体内の機能を担う最も重要な生体高分子であるタンパク質の構造や進化について学習し、アミノ酸配列解析やタンパク質の立体構造表示に関する演習及びこれらを駆使して作成した課題のプレゼンテーションを行うことを通じて、タンパク質の構造や進化について理解できるようになることを目的とする。
生物の分類	秋	木	2	大西 信弘	現在、どのような生物が地球上に存在し、それらはどのような類縁関係を持っているのかについて学修し、生物の進化の歴史について理解を深め、生物の進化の歴史と現存する生物の系統関係について修得することができる。
植物生理生態学	秋	木	3	藤井 孝夫	植物を理解するのに必要な構造と機能を分子、細胞、個体のレベルで理解し、植物研究を行うための基礎力をつけることを目標とする。具体的には、植物や細胞の構造と機能、エネルギー確保の仕組み、環境ストレス（水・重力・光・有害物質、病原微生物など）への対処、植物ホルモンや植物の栄養などについて理解する。またアレロパシーや植物と微生物の共生などについても理解する。講義にはプリント資料を配布し、講義3回終了ごとに小テストを実施し、理解度を確認する。
生物の多様性	秋	木	3	大西 信弘	近年、様々な場面で生物多様性は重要視されてきている。そこで、生物多様性について基礎的な考え方を修得するために、生物において様々なレベルで多様性が生み出される仕組みとその機能を理解する。

## 授業概要（教職課程科目）

科目名	学期	曜日	講時	担当者	授業概要
【教】教職入門	春	火	5	池田 恭浩	現代社会に求められている教員の役割・資質能力・職務内容等について理解を深め、教職の意義について考えることにより、教職に対する適性を判断し、進路選択に生かせるようにする。授業では、教員についての基本的な法令やチーム学校運営、生徒指導、学習指導、教育評価など、教員の職務内容の全体像を具体的に取り上げる。そして、それらについて各自が意見を出し合い、議論することで、教員としての見方や考え方を身につけられるようにする。
【教】理科教育法Ⅰ	春	金	3	友松 勝之	中学校及び高等学校理科の目標や内容についての基礎知識を、中学校学習指導要領解説・理科編及び高等学校学習指導要領解説・理科編・理数編の精読とグループ討議を通して、課題解決的に習得できるようにする。また、理科教育における特徴的な指導法や環境教育などの事例研究を通して、授業づくりの手がかりを得る。さらに、安全管理や学習指導案の構成・評価方法などの講義を通して、実務上の課題についての見識を深める。
【教】理科教育法Ⅲ	春	金	4	友松 勝之	中学校理科の目標や内容についての基礎知識を、中学校学習指導要領解説・理科編の精読とグループ討議を通して、問題解決的に習得できるようにする。また、検定教科書や学校現場の実践例を資料にした講義・演習をもとに、中学校理科の教材や授業の進め方及び評価方法についての理解を深める。これらを通して、中学校理科の授業づくりの基礎・基本の習得をめざす。
【教】教育制度論	春	金	5	友松 勝之	国家社会におけるもっとも重要な教育制度である学校の歴史、法制、行政など、その制度全般に関わる事項を学び、同時に学校と地域との連携や学校安全への対応という現代的な課題についても十分な知識や理解を身に付けるよう指導する。
【教】特別活動及び総合的な学習の時間の指導法	春	金	5	池田 恭浩	学校における様々な構成の集団活動において、課題の発見や解決を行い、よりよい集団や学校生活を目指して行われる特別活動と、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成を目指す総合的な学習の時間について、学習指導要領解説に基づいて理解を深めていく。さらに、学校現場でより効果的な学習活動をするための指導計画の作成における基礎的な知識や考え方を身に付けていく。また、具体的な事例を通して、特別活動と総合的な学習の時間の指導や評価の方法、共通点などについての考察を進めていく。
【教】教職入門	春	月	5	池田 恭浩	現代社会に求められている教員の役割・資質能力・職務内容等について理解を深め、教職の意義について考えることにより、教職に対する適性を判断し、進路選択に生かせるようにする。授業では、教員についての基本的な法令やチーム学校運営、生徒指導、学習指導、教育評価など、教員の職務内容の全体像を具体的に取り上げる。そして、それらについて各自が意見を出し合い、議論することで、教員としての見方や考え方を身につけられるようにする。
【教】教育方法	春	集中		立田 慶裕	本講義では、継続的な学習者としての教員の資質向上を図り、従来の教育方法に加えてIT活用を重視し、学習者の動機付けと学習スキルの向上を図る多様な教育と学習法を実践的手法により学ぶ。特に今後学校教育において展開される教育方法として、学習の動機付けと学習スキルを大きく向上できる「調べる学習」に焦点を当て、児童・生徒が自ら知識を生成するプロセスを支援できるような教材作りを実践を通じて学ぶ。同時に、授業を運営する方法としてのカリキュラムマネジメントのスキルを習得する。本講義によって、本学のDPに掲げられた教員としての専門知識とスキル、協働して活動できる社会的態度の形成を目指す。
【教】農業科教育法Ⅰ	春	水	1	中井 順市	農業及び農業教育の置かれた状況や関連する法規・法令等の背景及び関係を理解するとともに、農業教育の特質や特徴を踏まえた上で、実際の教育活動について事例をとおして学習する。また、農業教育を支える学校農場やその運営システム等についても学習し、学習指導要領に示された内容を中心に学ぶ農業科教育法Ⅱの学習に繋げる。
【教】職業指導Ⅰ（農業）	春	水	4	中井 順市	教育政策における進路指導・キャリア教育及び職業の概念、職業指導の役割や課題、専門高校の進路状況や生徒の進路意識、専門高校と高等教育機関や産業界との連携などについて学ぶ。また、関連する各種データを用いて分析を行うとともに、その分析に基づく意見交換等も行う。
【教】道徳教育の指導法	春	水	4	牧崎 幸夫	道徳の意義を踏まえ、学習指導要領に示された道徳教育の目標、内容等について理解するとともに、道徳教育の「要」とされる道徳科の学習指導案作成や模擬授業等を行いながら実践的指導力の基礎を身につける。

## 授業概要（教職課程科目）

科目名	学期	曜日	講時	担当者	授業概要
【教】教育原論	春	水	5	竹熊 耕一	中学校、高校の教員として働くにふさわしい専門性と人間性を、4年間の大学教育を通して培うプログラムが教職課程である。本講では、「教職」のための教養の基礎部分として、教育の理念、思想、および歴史を学び、人間社会でなされている教育という活動の本質と意味を理解する。講義は大きく3つの部分に分かれる。第1部では、人間にとっての教育の緊要性を考え、それがもたらす発達の可能性を確認する。第2部では教育を構成する基本的な概念を、代表的な思想家から学ぶ。第3部では、人間の社会生活を支える重要な教育の機能を歴史のなかにとらえ、とくに学校制度が近代以降の国家社会の進展にどのように関わってきたかを理解する。
【教】生徒・進路指導論	秋	火	2	坂口 義裕	学校における生徒指導と進路指導の意義及び目的を理解し、具体的な方法論と展開例を学ぶ。またこれらの方法論が学校の現場でどのように適用されているか、具体的な問題と指導実践と指導体制の理解を深める。キャリア形成の観点から、生徒指導と進路指導が目指す方向の基本的理解を促す。
【教】理科教育法Ⅱ	秋	金	3	友松 勝之	理科の授業づくりの要件の習得と、教材研究を生かした学習指導案の作成ができるようになることをめざす。また、模擬授業と事後の授業検討会などを通して、わかりやすい授業の要素と授業参観の視点を体得する。
【教】理科教育法Ⅳ	秋	金	4	友松 勝之	中学校理科の授業づくりの要件の習得と、教具や指導方法の工夫など教材研究を生かした学習指導案の作成ができるようになることをめざす。また、模擬授業と事後の授業検討会などを通して、わかりやすい授業の要素と授業参観の視点を体得する。
【教】教育課程論	秋	金	5	池田 恭浩	各学校の教育活動の中核として最も重要な役割を担う教育課程について、学習指導要領解説総則編に基づいて理解を深めていく。さらに、教育課程に関する具体的な事例を通して、教育課程の編成・実施・評価・改善（カリキュラム・マネジメント）などについての考察を進めていく。教育課程について学ぶことにより、学校現場でより効果的な教育活動をするための指導計画の作成における基礎的な知識や考え方を身に付けていく。
【教】教育制度論	秋	金	5	友松 勝之	国家社会におけるもっとも重要な教育制度である学校の歴史、法制、行政など、その制度全般に関わる事項を学び、同時に学校と地域との連携や学校安全への対応という現代的な課題についても十分な知識や理解を身に付けるよう指導する。
【教】教育相談	秋	集中		竹中 菜苗	教育現場においても「カウンセリング・マインド」という言葉が用いられるように、学校の教員にもカウンセリングについての基本的な知識および態度が求められるようになってきている。本授業では教育現場で起きやすい心の問題をいかに理解し、教員として関わるかについて、臨床心理学的な視点から学ぶ。適宜、講義のトピックに関連する映画や小説、心理臨床事例を具体的な素材として取り上げ、グループディスカッション等を通じて自分自身で考える力を身に付け、実践的な力を養う。
【教】教育方法	秋	集中		立田 慶裕	本講義では、継続的な学習者としての教員の資質向上を図り、従来の教育方法に加えてIT活用を重視し、学習者の動機付けと学習スキルの向上を図る多様な教育と学習法を実践的手法により学ぶ。特に今後学校教育において展開される教育方法として、学習の動機付けと学習スキルを大きく向上できる「調べる学習」に焦点を当て、児童・生徒が自ら知識を生成するプロセスを支援できるような教材作りを実践を通じて学ぶ。同時に、授業を運営する方法としてのカリキュラムマネジメントのスキルを習得する。本講義によって、本学のDPに掲げられた教員としての専門知識とスキル、協働して活動できる社会的態度の形成を目指す。
【教】農業科教育法Ⅱ	秋	水	1	中井 順市	高等学校学習指導要領の内容を踏まえた上で、農業に関する科目の指導方法、指導計画や学習評価の意義・目的・方法等について理解するとともに、指導計画の作成、模擬授業等をとおして、指導に関する基本的な知識や技能を学ぶ。
【教】職業指導Ⅱ（農業）	秋	水	4	中井 順市	キャリア教育の概要、学習指導要領における職業指導の取扱い、職業指導に関する教育行政や労働政策、将来を見通したキャリア学習に基づく指導計画の作成、諸外国におけるキャリア教育の現状と課題等を学ぶ。また、次代を担う人材を育む教育の観点から今後の職業指導のあり方についての意見交換も行う。

授業概要（人文学部科目）

科目名	学期	曜日	講時	担当者	授業概要
社会心理学 I	春	火	3	有馬 淑子	社会心理学 I では、社会心理学・集団心理学・家族心理学について学びます。心理学の基礎概念をおさえた後に、人間関係や態度に関する社会心理学の基礎知識と、集団から社会に広がる影響過程を学びます。私たちの自己は社会によって形作られ、その自己の相互作用が社会を作り上げていくという循環する過程を理解して頂くことがねらいとなります。人間の行動は状況によって変化しますが、私たちは過度に個人や集団の特性だと判断する傾向があります。そのような無意識のうちに歪む認知を自ら修正するためには、科学的思考方法が必須となります。この講義を通じて科学的思考方法を身につけて、他者の不合理な信念にたやすく影響されない、独立した判断ができる人間になっていただきたいと願っています。
妖怪文化論 A	春	火	4	佐々木 高弘	古来、日本人は、身近に、妖怪なる存在を認識してきました。人が病気になるったり、日照りが続いたり、洪水が起こったりした時、人々は、その原因を妖怪に求めてきたのです。その正体は、最初は誰も見たことのない、形のない、存在として、気配や音、あるいは匂いや肌で認識していました。つまりそれは、語りの世界でのみ存在していたわけです。このように存在しない文化を研究するには、人類の認識に関する様々な理論を理解する必要があります。後に、日本人はそれを図像化するようになります。それが妖怪画として知られるようになり、現代の私たちにとっては、妖怪を漫画や映画等によって、具体的な姿形と共に、想像するようになっていきます。このように、妖怪なる存在は、語り、文学、絵画、漫画、映画等で描かれ続けてきた、一つの日本文化の姿であることを理解します。
古文書講読 I	春	金	3	鍛冶 宏介	歴史学は、過去の人々が残した史料を読み解きながら、歴史を明らかにする学問です。しかし現代に残る史料のほとんどは翻刻（現代の文字に直すこと）されることなく、くずし字のまま残されています。つまり、本格的に歴史を調べる際には、くずし字の読解能力が必須となります。くずし字読解能力を持てば、織田信長や坂本龍馬の手紙も、怪談を記した書物も、文学作品も自由自在に読むことができます。本講義では、くずし字読解能力を獲得するために、往来物や浮世絵などの写真のコピーをテキストとして、くずし字をみなさんに読んでもらいます。
歴史学特殊講義 (近世) I	春	金	4	鍛冶 宏介	江戸時代は書物の時代ともいわれています。色鮮やかな錦絵や、番付、小説や教科書、辞書、儒学書、まじない本など、多種多様な本が出版され、日本各地の村々にいたるまで書物が行き渡った時代です。本講義では、現在、講師が研究対象としている江戸時代の書物文化について、おもに講師の研究に基づきながら、江戸時代の多様な出版物を紹介し、それらがどのように作られ、広まっていたのかを検討します。書物を史料として、江戸時代という時代の特色を読み解いていく授業となります。
歴史学特殊講義 (中世) I	春	月	4	平 雅行	中世の歴史文化に関して、2つのテーマをとりあげる。第1は、中世の人々はなぜ宗教を信じていたのかという問題を、技術史的背景から考える、第2は外来文化である仏教がなぜナショナリズムと結びついたのかという問題を、神仏関係を素材に考察する。①中世は技術が進歩したという側面と、技術がまだまだ未熟であるという二つの側面をもつ。宗教は合理性を超越したものだ、しかし技術や知識が進歩してくると、宗教の内部に合理性を取り入れなければ社会の信頼を維持することができなくなる。他方、技術の未熟さ、人間の力の限界は、呪術や宗教への依存を不可避とする。これらを通して、中世仏教における合理と非合理との関係について考えたい。②仏教はもともと外来文化であるが、それが日本社会に定着するようになると、仏教が日本的なものとなされ、仏教の繁栄が日本の卓越性を示すものとされた。そしてそれがモンゴル襲来を機に独善的な神国思想へと変容してゆく。外来文化がナショナルな感情と結びついていった原因について考えたい。
異文化交渉史	春	水	2	丸田 博之	主として、中世から近世における、日本とヨーロッパ、日本と中国大陸・朝鮮半島の文化的交流について考える。ヨーロッパは特にポルトガル・イタリア、オランダが対象地域であり、中国・朝鮮は宋・明、李氏朝鮮が考察対象となる。

## 授業概要（人文学部科目）

科目名	学期	曜日	講時	担当者	授業概要
心理統計学Ⅰ	春	水	2	行廣 隆次	心理学研究では、データに基づいて判断を下すために統計的な方法が不可欠である。心理統計学Ⅰでは、心理学研究で用いられることの多い統計手法のうち、基本的な手法について、分析の視点、データの収集と整理の方法、分析結果の解釈の仕方について学習する。これらの学習を通して、自ら収集したデータを解析できる能力、また公刊されている論文や資料等に報告されている統計分析結果を読むことができる能力を身につける。これらは、卒業研究等で自らデータを収集し研究を行う時に重要な能力であり、さらには科学的証拠に基づいて論理的に判断を行うことができる思考力の獲得につながる。
口承文芸論A	春	木	3	手塚 恵子	本講義は口承文芸の作品を紹介すると共に口承文芸に関する先行研究を検討するものです。口承文芸とは、語られたもの、歌われたもののことを言います。例えば昔話、神話、語り物、歌、うわさ話、諺、ジョークが、これに該当します。一見するとこれらは、たいへん古くさく（実際たいへん長い歴史をもっています、文字が発明される前から、世界各地で話され歌われてきました）みえますが、コンピュータゲームやポップミュージックなどの現代文化とも密接に結びついています。口承文芸は何時の時代でも、古くてかつ斬新なものなのです。Aでは口承文芸の作品に親しむことからはじめ、作品分析の主要な方法論を理解することを目標にします。
江戸文化論	春	木	3	山崎 ふさ子	日本の江戸時代の文化を中心に扱う。江戸時代、三都と言われたのは江戸・京・大坂であった。江戸前期に京・大坂を中心とする上方文化が栄え、後期は文化が東漸し江戸文化が栄える。この講義では、東西の文化を比較しつつ、江戸文化を紹介することによって、上方、特に京都文化を逆照射することを試みたい。武士・町人の人口割合も影響したといわれる当時の東西文化の特徴が、現代の当地気質にも及んでいることを考察したいと考える。具体的には、浮世絵を文学の立場から読み解いてみることを試みたい。北斎の『北斎漫画』や国芳の絵本を題材に、北斎に取りあげられユーモラスに描かれた江戸時代の町の人々のくらしの様子を読み解き、時には歴史上の英雄や妖怪などの絵にまつわる日本と中国の多彩な物語を紹介していく。フィールドワークとして、江戸時代の遊里の代表的な建築物である島原の「角屋」の見学を行う。
認知心理学	秋	火	2	行廣 隆次	認知心理学は、人間が外界からの情報を受け取り、理解したり貯蔵したり、あるいは情報を加工して出力する、といった心の働きの仕組みを研究対象としています。この授業では、人間の認知の主要領域について、その性質と、それを説明する心理学的なモデルや理論、また理論の根拠となっている心理学実験等を合わせて学習することによって、人間の認知の仕組みについて理解します。このような人間の認知機能の性質を理解することは、日常生活の中での人間の認識と行動の理解につながります。また、さまざまな認知機能に関する実験的研究と心理学理論を中心に、神経科学やシミュレーション研究などからの知見も合わせて学習することを通して、認知心理学における研究方法の特徴を理解し、科学的に研究し、論理的に考える方法を修得します。
サブカルチャー論	秋	火	3	堀田 穰	都市伝説というコトバが学術用語ではなく一般の日常会話のなかに現れるようになったのは、それほど古い話ではない。村落共同体での口頭伝承である昔話の研究が進められる中で、都市においてもかつての昔話や伝説のような口頭伝承が生成されつつあることが明らかになり、「学校の怪談」などポピュラーな切り口がされるに至って、一般の人気を得たものと思われる。そのように見てみると、それらはほとんどサブカルチャーと同義とも考えられる。カルチャー以前、対抗文化、大衆文化等々のサブカルチャーに関する言説と重なるのである。大衆社会が登場するのは近代においてであるが、我が国の場合、江戸後期にはすでにその萌芽が生まれており、江戸が生み出した怪談までを対象とする。
妖怪文化論B	秋	火	4	堀田 穰	古来、日本人は、身近に、妖怪なる存在を認識してきました。人が病気になったり、日照りが続いたり、洪水が起こったりした時、人々は、その原因を妖怪に求めてきたのです。その正体は、最初は誰も見たことのない、形のない、存在として、気配や音、あるいは匂いや肌で認識していました。つまりそれは、語りの世界でのみ存在していたわけです。後に、日本人はそれを図像化するようになります。それが妖怪画として知られるようになり、現代の私たちにとっては、妖怪を漫画や映画等によって、具体的な姿形と共に、想像するようになってきました。このように、妖怪なる存在は、語り、文学、絵画、マンガ、映画等で描かれ続けてきた、一つの日本文化の姿なのです。妖怪文化論Bでは、そのうち特に、描かれた妖怪と、妖怪が跳梁するメディア、表現について論じます。

## 授業概要（人文学部科目）

科目名	学期	曜日	講時	担当者	授業概要
古文書講読Ⅱ	秋	金	3	鍛治 宏介	歴史学は、過去の人々が残した史料を読み解きながら、歴史を明らかにする学問です。しかし現代に残る史料のほとんどは翻刻（現代の文字に直すこと）されることなく、くずし字のまま残されています。つまり、本格的に歴史を調べる際には、くずし字の読解能力が必須になります。くずし字読解能力を持てば、織田信長や坂本龍馬の手紙も、怪談を記した書物も、文学作品も自由自在に読むことができます。本講義では、くずし字読解能力を獲得するために、さまざまな古文書の写真のコピーをテキストとして、くずし字をみなさんに読んでもらいます。
歴史学特殊講義（近世）Ⅱ	秋	金	4	鍛治 宏介	江戸時代は書物の時代ともいわれています。色鮮やかな錦絵や、番付、小説や教科書、辞書、儒学書、まじない本など、多種多様な本が出版され、日本各地の村々にいたるまで書物が行き渡った時代です。本講義では、現在、講師が研究対象としている江戸時代の書物文化について、おもに講師の研究に基づきながら、江戸時代の多様な出版物を紹介し、それらがどのように作られ、広まっていたのかを検討します。書物を史料として、江戸時代という時代の特色を読み解いていく授業となります。
歴史学特殊講義（中世）Ⅱ	秋	月	4	平 雅行	近年の高校日本史の教科書では、中世を鎌倉幕府ではなく、院政時代から始めるものが増えている。学界の定説を反映させたものであるが、これは中世の始まりが150年早くなったというだけの話ではない。鎌倉幕府の成立よりも、院政時代の方が重要な歴史的画期であるということだ。それはまた、中世を武士・幕府・鎌倉新仏教で捉えてきた歴史像への批判であるし、鎌倉新仏教という概念の有効性すら否定されようとしている。日本中世は本当に武士の時代なのだろうか。鎌倉新仏教の時代なのか。本講では、仏教・寺院を中心的素材としながら、日本の古代社会から中世社会への転換過程を検討する。
京都学（京ことば）	秋	水	2	丸田 博之	「京ことば」を多角的に研究する講義である。京ことばは長く日本の中央語であった。つまり、京都語の歴史はそのまま日本語の歴史と言ってもよい。本講義では、その京都語の中央語性に鑑み、音韻、文法、語彙の変遷を詳しく見ていきたい。
心理統計学Ⅱ	秋	水	2	行廣 隆次	心理学を学ぶ学生が、研究に必要な統計的手法を理解し、自らデータに手法を適用できるようになることを目標とする。心理統計学Ⅱでは、心理学研究で利用されることの多い代表的な統計的手法について、推測統計の手法（検定など）を中心にその原理と使用方法を学習する。どのような研究デザインにどのような手法が適用できるのかという枠組みから整理した上で、各手法を用いて実際に分析を行うために必要な手続きと、分析結果の解釈のしかたを修得する。また、分析を正しく使用するために必要な、分析手法の原理を理解する。推測統計の各手法は、得られた研究データから得られた知見を、一般化するための判断基準として大変重要な視点である。それらの学習を通して、実証的な心理学研究を行うための基礎的能力と、科学的証拠に基づいて論理的に判断を行うことができる思考力を身につける。
表現文化論	秋	水	2	君塚 洋一	作品表現は、作家の心的イメージや経験、予見が表現されたものであると同時に、社会の人々の経験や意識、願望が凝縮されたものでもある。それは、多くの人に作家自身の思考を広めるとともに、作品に触れる者には自己の心象風景との照合や同一視を起こさせ、新たな経験をもたらす。社会のなかで「対話や共有の相手」をつくり出す作品表現の役割、作品表現をはぐくむ社会のしくみや人と人との相互作用、新たな時代に求められる社会運営やまちづくりの場に活用される新たな作品表現のあり方——メディア論や芸術社会学の視点からこれらを解き明かしつつ、新たな社会をつくり、そこで生き残っていくために、「作品表現」のこれまで・これからをとらえ直していく。音楽・映画・美術・写真・広告などさまざまな表現分野を扱い、映像や音楽、図版などなるべく多くの作品素材をもとに進めていく。
王朝文化論	秋	木	2	山本 淳子	王朝文化を知るうえで欠かせない古典文学の代表作・『源氏物語』と、平安時代の実在の人物として現代のエンターテインメント作品に最も二次創作されている人物・安倍晴明について学ぶ。また、受講後、自由な時間を使って各自フィールドワークを行う。授業では古典作品を扱うが、すべて現代語訳付きなので、古語や文法についての心配は無用。ただし、費用と時間と労力がかかる授業であることを承知の上、受講すること。

## 授業概要（人文学部科目）

科目名	学期	曜日	講時	担当者	授業概要
口承文芸論B	秋	木	3	手塚 恵子	<p>本講義は口承文芸の作品を紹介すると共に口承文芸に関する先行研究を検討するものです。口承文芸とは、語られたもの、歌われたもののことを言います。例えば昔話、神話、語り物、歌、うわさ話、諺、ジョークが、これに該当します。一見するとこれらは、たいへん古くさく（実際たいへん長い歴史をもっています、文字が発明される前から、世界各地で話され歌われてきました）みえますが、コンピュータゲームやポップミュージックなどの現代文化とも密接に結びついています。口承文芸は何時の時代でも、古くてかつ斬新なものなのです。Bでは口承文芸が、カミとヒトの、人と人のコミュニケーションであることに焦点をあて、関連する先行研究を通じてその分析方法を理解し、学生自身で作品分析することを、目標とします。</p>
社会問題論	秋	木	3	小川 賢治	<p>人々の心理と生活に大きな影響を与える現代社会の諸側面、特にその問題点について学ぶ。個人の心理をよりよく理解するためには、その個人が生きている社会の実情・問題点を把握しておくことが必要である。そのような問題としては、経済的格差と貧困、非正規雇用、健康保険制度を含む医療制度、税制と財政、食糧自給率と食品添加物、監視社会と管理社会化、などがある。また、それらの理解の助けとなるので、その時々々の時事問題についても知識を持つ。</p>